

水産政策審議会第21回企画部会速記録

平成20年1月25日

水産庁

平成20年1月25日
於・水産庁中央会議室

水産政策審議会第21回企画部会速記録

目 次

1、開 会	1
1、資料説明及び討議	
(1) 「平成19年度水産の動向」(1 次案)	1
(2) 「平成20年度水産施策」(案)	16
1、その他	19
1、閉 会	20

開 会

石川企画課長 それでは、定刻になりましたので、ただいまから水産政策審議会第21回企画部会を開会させていただきたいと思います。

まず、私の方から委員の出席状況について御報告をいたします。本日は委員が現在のところ6名、特別委員4名の方が御出席でございます。本日の企画部会は適法に成立しておりますことを御報告申し上げます。

初めに、本日の会議の議題でございますが、これは「平成20年度水産施策」(案)の諮問というふうになっておりましたけれども、本日はこの(案)を御審議いただくということで、正式な諮問につきましては、次回の3月に開催される予定の企画部会の際に行うこととしたいと思っておりますので、御了承いただきたいと思います。

それでは、部会長に議事進行をよろしく願います。

資料説明及び討議

(1)「平成19年度水産の動向」(1次案)

山内部会長 それでは、審議に入りたいと思います。

その前に、申しわけございませんけれども、私は次に4時からの会議が控えていますので、できたら3時半までに終わりたいと思います。もし終わらなければ、石井委員に引き継いでやっていただきたいと思いますので、御遠慮なく発言していただきたいと思いますので、よろしく願います。

本日の議題は、「平成19年度水産の動向」(1次案)と「平成20年度水産施策」(案)についてでございます。まずは「平成19年度水産の動向」(1次案)の資料についての説明と質疑・討議、それが終わりました後に、「平成20年度水産施策」(案)について御提案いただき質疑・討議というふうに案件ごとに分けて進めたいと考えておりますので、何とぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず事務局の方から説明をお願いいたします。

石川企画課長 それでは、まず資料の御確認をお願いしたいと思います。資料1として「平成19年度水産の動向」(1次案)というのがございます。それから、資料2として「平成20年度水産施策」(案)をお配りしてございます。それから、参考資料として「平成20年度水産予算概算決定の概要」という資料もお配りしております。

まず、資料1の「平成19年度水産の動向」(1次案)につきまして、先日郵送してございますけれども、そのものから一部変更が出ているものについて御説明させていただきます。

まず表紙と目次のところをめぐっていただきまして、T-1ページのところから、「トピックス ~水産この一年」というページがございます。いきなりちょっと白いものが多いページで恐縮でございますけれども、これは海洋基本計画が現在、2月に策定予定ということで作業中でございますので、ちょっと白くなっておりますが、この海洋基本法が制定というトピックスを初めとして、この一年で起こった出来事をトピックスとして記述したいと思っております。

トピックスの内容としては、前回の企画部会でもちょっとお諮りしましたけれども、現在のところの案としてはこの6つのトピックスで構成したいと思っております。海洋基本法の制定から始まりまして、2、3、4、5、6と燃油価格の高騰による影響に至るまでの6つのトピックスを用意してございます。

このトピックスのところをずっとめぐっていただきまして、特集-1というページでございますが、これにつきまして変更点を簡単に御説明いたしますと、前回の企画部会におきまして、そもそも「魚食文化」とは何か、というような御指摘などもございました。また、「魚食」というものが変わったのではなくて、「魚食文化」が変化してきた。こういったような御議論もございました。

特集-2のところ、「魚食文化」とは何かというところも少し加筆いたしまして、それとともに、ちょっと戻りますけれども、特集-1ページの「自然の恵みを余すことなく利用してきた、日本人の知恵」というところで、海の恵みを享受してきたというところで、海だけではなくて内水面ですね、湖とか汽水域からも恵みを受けているということを加筆させていただいております。

それから、ページをめぐっていただきまして特集-4ページあたりですが、ここにつきましてはいろいろ御指摘がありまして、経済行為と文化が同時に書かれていてわかりづらいという御指摘もございまして、修正を加えてございます。ここに書いてあります図 -

1 - 2の「消費者ニーズと流通・生産の関係」という図を少し工夫いたしまして、まず図の左側で、上に書いております消費者のところから、ニーズが変化して、それを発端とするところの流通、それから漁業に対するニーズの変化の影響。それに対して図の右側の方では、今度はニーズの変化に伴って供給の側が変化してきたということを整理して書いたつもりでございます。

またしばらくページをめくっていただきまして、特集 - 10ページあたりでございますが、これについても前回の企画部会で、雑魚と言われるような魚を消費することも大切だという御議論もございまして、また事例紹介などのところで、コラムの中で飲食店向けの例だけではなくて、そのほかにも優良事例があるのではないかという御指摘もありまして、「理由(わけ)あり魚セット」というような、インターネット販売の事例なども加筆してございます。

またページをめくっていただきまして、特集 - 14ページでございますが、図 - 4 - 2の「漁業・流通・魚食の連携で加速させる海の再生」というところも、ちょっと前の図がわかりづらいのではないかという御指摘もありまして、工夫しまして、人間と海の営みというところを分けて書きながら、漁業・流通・魚食の連携による物質循環というものを何とかわかりやすくお伝えできないかということで、直してみました。

しばらく飛びまして、特集 - 27ページでございますが、「里海」の再生をめざしてというところでございますが、これについて前回、我々の原案についてはおおむねいいのではないかということで認めていただいたわけでございますけれども、これについては、さらに「里海」という言葉をきっかけとして、議論がわき起こって、活動も活発に行われているということで、今後の期待も込めた形でここに書いております。「里海」の再生をめざしてのところの最後のあたりの文章を加筆してございます。

それから、特集 - 29ページでも、同じく里海に関連しまして、取り組みに参加するだけではなくて、自分の行動が海の未来を変えるという意識改革と、それに伴う行動が求められていますということ、国民の皆さん一人一人の意識改革と行動が求められているというような表現を、下のあたりのところに加筆してございます。

それから特集 - 30ページ、特集のまとめのところでございますけれども、これについては最後の絵ですけれども、まとめのイメージとなるようなイラストを加筆させていただいております。

特集については以上でございます。

それから、動向編、「第 章 平成18年度以降の我が国水産の動向」ということが 1 - 1 ページから始まっております。動向編については、昨年までと同様に需給から始まりまして、国際動向、漁業経営、漁村の多面的機能等、こういった大きく挙げると4つの項目に分けて記述しておるところでございます。

簡単でございますけれども、主要な変更点については以上でございます。よろしくお願いいたします。

山内部会長 どうもありがとうございました。

ただいま御説明がございました「平成19年度水産の動向」(1次案)につきまして、皆さんの御意見をお聞きしたいと思います。動向編は、「トピックス」、「特集」、それから「平成18年度以降の水産の動向」という3つのパートに分かれておりますので、それぞれのパートごとに審議していきましようか。

それでは、まず「トピックス」について御意見をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

宮原委員、お願いします。

宮原委員 後でまた発言の機会をいただきたいと思いますのですが、このトピックスの中で、3の「マグロ養殖等への企業参入」の部分を読ませていただいて私思うんですが、このタイトルの「企業参入」が、余りにもギラギラするんじゃないかなと思ひまして、できれば「マグロ養殖等への期待」ということで修文して、タイトルだけ変えていただければ、中身はこれで結構だと思っております。

なぜかと申しますと、企業だけではなくて、漁業者の協業体みたいな形でのマグロ養殖、特に南さつまの方で昨年の「天皇賞」をたしか取ったところがございます。そういったことも踏まえまして、「企業参入」だけではちょっとマグロ養殖の実態にそぐわないのではないかと思いますので、企業も含めて、「期待」という言葉に変えてもらった方が、一般の漁業者も取り組みができるんだと。企業しかマグロ養殖できないというふうに限定的になると、いかがかと思ひますので、御検討いただきたいと思います。

山内部会長 事務局、いかがですか。

石川企画課長 確かにマグロ養殖の主体が企業に限られるわけではありませんが、地元の方々と一緒になって進められているという面もあります。それから、4番の「新規参入」のところとの仕分けもありますので、ここは表現を工夫したいと思います。御指摘ありがとうございます。

山内部会長 そのほかいかがでしょうか。

どうぞ。

婁特別委員 同じくT - 4ページなんですけれども、マグロの最後のところで、供給するために課題がまだ残されているという書き方をしていますけれども、いろいろ課題があって、種苗の問題もあるでしょうけれども、餌とか、環境への影響とか、あるいは出てきたマグロの安全性の問題とか、そういったような課題をもう少し指摘された方がいいのかなということです。

ついでにもう1点、今の「企業参入」という表現もそうでしょうし、その次の「漁業分野への新規参入」もそうですけれども、表現ぶりはどういうことにするか別として、何となく参入となると、例えば権利をちゃんと取得するというイメージがするんですけれども、実際は多分そうじゃないですよ。借りたりして、あるいは共同経営という形にしている。それから、漁業への新規参入ということは、もちろん参入ということもあるかもしれませんが、内容を見ますと、何となく連携ですよ。一生懸命、川上から川下あるいは川下から川上へ連携を深めていく、あるいは連携の仕組みをしているということなので、何か「参入」と言い切っているのかなというイメージを受けます。

石川企画課長 まずマグロのところの餌とか環境などの課題、御指摘のとおりほかにも課題が多々ありますので、これについては書き込んでいきたいと思います。当面、種苗の安定供給ということで、我々の施策とも関連して予算要求なんかもしているものもあったので、今のような案になっているんですが、御指摘のとおり、ほかの課題についても少し書き込んでいきたいと思います。

それから、T - 5ページの新規参入に関しては、確かに連携ということで進められていく実態があるわけですが、企業の方々は、漁業分野についても非常に新しい分野として、ビジネスのチャンスがある場所としてとらえられて、こちらのページにも載っていますビジネスマッチングフェアのところでも、かなり積極的な参加もあって、また実際の取り組みも始まったりしている例も多々ございます。そういった外部の企業の方の関心を主体に念頭に置いて、「新規参入」という言葉を使ったんですけれども、このところは、もちろん中身で書いてありますマッチングフェアにしても、連携を中心としてやっているわけですので、そういったことについての表現ぶりについては、またちょっと考えてみたいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 そのほかいかがでしょうか。

どうぞ。

島貫特別委員 私はだれがやるかというのは問題として触れたくはございませんが、このT - 4のマグロに関して、実際に現場に行って2回ほど見ていますけれども、こういう技術が確立されつつあるということは非常に喜ばしいことで、それはだれが担うのかの問題はまた別の論議として、安全性が問題であればそれはそれでまた一生懸命、そういうふうなことで研究開発すればいいんであって。やはり、こうしたことの科学的な技術というか、こういう栽培というか、こういうふうなことの産学協同の研究こそが非常に大事なことでないか。

同じように言えば、T - 7でウナギの件についても触れられています。ウナギのふ化が成功した。このことに対して、一言も触れられておりませんが、こうしたことがやはり日本の将来を予見するというか、リードするというか、そういうふうな意味ではやはり貴重なことであって、もっとこういうことについて関心を示すべきではないか、白書でアピールすべきではないかと思います。だれがやるかは、これはまた別問題だと思います。

山内部会長 お願いします。

石川企画課長 確かに養殖の中でも、特にマグロに関しては、これからの成長分野として非常に注目されているということで、我々もこういう形でトピックスにも挙げて御紹介したいと思っているところでございます。また、産学協同の取り組みということで多少書かせていただいておりますが、今御指摘のあったウナギの点については、書いてあるトピックスの項目が、ワシントン条約の関係で書いたものですから、こちらは若干足りなかった部分もあるかもしれませんが、こちらについても技術開発はかなり注目されている部分がありますので、それについてはどこかで書き込めるようにしていきたいと思えます。ありがとうございます。

山内部会長 そのほかいかがでしょうか。

それでは、トピックスはひとまず置きまして、もし全体的にあれば後でまた戻っても結構ですので、次に「特集」について御意見がございましたらお願いします。

濱田特別委員 特集は全部通してよろしいのでしょうか。何点かございます。意見というところでお聞きいただきたいと思えます。

1つが、特集 - 2のところの「魚食文化」とは何か、というところ。コラムの上の3行目でしょうか、「魚を中心とした食生活の中で受け継がれ、蓄積されてきた文化を総称す

る概念が「魚食文化」、これでもいいかもしれないんですが、むしろ蓄積されてきた知恵とか知識、やはり日本人の共通の知恵だと思いますので、蓄積されてきた知、あるいは知恵を総称する概念が「魚食文化」の方がいいという感じがしたということ。これが1点です。

それから、2つ目は単純なことなんですが、特集 - 4 の1行目、本当の技術的な印象だけなんですが、右の方の一番上のところに、「量を重視した資源の回復力を上回る」云々という、何か文章的に。資源の回復力を上回る漁獲競争によっての方が、例えば文章が流れるのかなと。これは技術的な表現のところでございます。

3点目、特集 - 10の一番下の2行目、「消費者に新しい発見や感動を与えることが求められています。」、これはもちろんこれでいいと思いますが、島貫委員さんが右に座っておられますが、流通とか商業が何で社会的に必要かという今の中でのことを考えると、感動を与えることなど需要開発だと思うんです。だからもっと突っ込んで、需要開発をきちんとやってくださいよという形の文言をもう少し入れた方がいいのではという印象を持ちました。これが3点目になります。

それから、4点目が特集 - 13でございます。コラムのところの図が、いまいち今回もよくわからないというか。上の方なんですが、まずタイトル、テーマからいきますと、コラムで述べていることと言うと、「資源量の豊富な魚介類を食べるクジラ」というよりも、クジラの大食に対して、クジラの大食と資源なり生態系の管理みたいなことを、ここでメッセージとして、全体としてうたっているんじゃないかという印象が私にありますので、「資源量の豊富な魚介類を食べるクジラ」というテーマは、ちょっと違和感を持ったというのが1点でございます。

その中で、その図の上の方ですが、これはクジラの出現頻度になって、恐らくその時々が一番とれる云々という、コラムの中に載っているイワシであったり、サンマであったりということ、図の上の方の部分で指摘されようとしていると思いますが、これだと出現頻度というよりも、素人的には胃の内容物という感じがします。だから、このところをもう少しわかりやすくしていただきたいということでございます。

もう1つ細かい点は、時間の関係で技術的ですのでカットしたいと思います。

山内部会長 どうもありがとうございました。

大橋補佐 濱田先生、最初の方のエディトリアルな指摘ですね、例えば文化のところは、知恵にするとか、そういうところは適切な指摘なので取り入れたいと思います。

それから、コラムのところだと思うんですけども、特集 - 13ですね。前は、クジラはいま目の前にあるたくさんあるものを食べるんです。だからこそ人間も、特集 - 12にありますように、資源的にたくさんあるものを食べましょうと、そういう同じコンテキストで書いたつもりだったんですけども、その後またいろいろな人の意見が入りまして、ちょっとこういう表現になりましたので、もうちょっとメッセージが伝わるように工夫したいと思います。

それから、出現頻度のところは、御指摘のとおり胃の内容物に占める魚種の割合ですので、ここは工夫してわかりやすいように修正します。

濱田特別委員 もう1つ忘れていました。特集 - 14でございます。図の方の先ほどのこれ自身は工夫されて異論はそれほどないんですが、当然、前ページの13のところをこの図に集約したということだと思いますので、そうだとすれば、この図は輸入水産物を食べるのではなくて、国産魚を食べてもらって、日本近海の海域をうまくここで言う海の再生につなげようということですので。ただ、この図 - 4 - 2 は人間の営み一般ということですから、そうではなくて、例えば右の魚食のところに、括弧して「国産魚」というのを入れたり、それから、海の営みのところの下の囲みが「生産」になっていますが、そこは日本近海云々という形で、輸入魚ではなくて日本の近海のものについて、魚食云々という形にもうちょっと。一般ではなくて、日本という形のものにした方がいいという印象でございます。

石川企画課長 今回の御指摘のところは、確かに物質循環を成り立たせるということから言えば、まさしく国産の魚を食べることによって、日本近海の海の営みとの間で物質循環が成立するというところでございますので、ここは訂正したいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 どうぞ。

越川特別委員 私は理科に弱いので、もしかしたら私だけが知らなくて、皆さん御存じなんだろうけれども、この特集 - 14の図ですが、「人間の営み（消費・栄養の供給）」と書かれています。漁業の下に、「栄養塩を陸上に回収」と書いています。それから、「海と魚食の橋渡し」、それから、魚食は「栄養塩の供給」と。「栄養塩を海に供給」とその下に矢印を書いています。こういう語句は、これは一般消費者にも当然読ませるものだと思いますけれども、これで本当に通じるのかどうか大変疑問に思います。栄養塩を海へ供給というのはどういうことなんだろうかと、当然こういう疑問が出てくると思いま

す。この辺はもうちょっとわかりやすい字句で、せつかく図にするんですから、もう図を見たらわかるようにしなければいけないと思います。まして、その言葉で迷うようなことがあってはいけないなと思います。

山内部会長 事務局お願いします。

石川企画課長 このところは確かに御指摘のとおり、栄養塩と言うとなかなか一般の方にはわかりづらい言葉になるかと思しますので、もう少し表現の仕方を工夫してみたいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 そのほか。

山本委員、お願いします。

山本委員 特集 - 3 なんですけど、 - 1 - 1 の 1 人 1 年 当 たり 魚 介 類 購 入 量 の 推 移 と いうことで、ちょっとこれの意味が、これ魚の種類が違って、何を言いたいのかよくわからないんですけども。重量で例えばこんな魚種で何キロ、何キロないんでね。これはマグロがあって、これはよくわからないんですけど。

石川企画課長 このところは、まだ写真ができていないので申しわけないんですけども、仮置きの絵だけ、イメージで、これではちょっとわかりづらかったと思います。実際に魚とか魚介類、当時の家計の購入量から見て形にしてみると、これだけの魚を 1 年 1 人 当 たり 食 べ て い ま し た よ と いうことを写真にして示したいということで、まだ前回と同じでイメージだけにとどまっておりましたので、申しわけございません、ここは早急に写真をつくって。実際に食べていた分量だけの魚を写して、それでお示ししたいと思っております。

山本委員 わかりました。

山内部会長 越川委員、お願いします。

越川特別委員 小さなことなんですけど、前回たしか私お話ししたと思うんですけども、特集 - 8 の、「鮮魚はお客様とのコミュニケーションのきっかけづくり」というボックスがありますけれども、その対面販売の様子という写真が使われていますが、これは何か閑散としていて、鮮魚売り場の活気というものが全然感じられないということで、これでは商売、はやってないなという感じでどうもイメージ的によくないと思いますので、写真はもっと元気のいい写真に変えてほしいなと思いました。

石川企画課長 確かに前回そういう御指摘をいただいておりまして、まだ差し変わってなくて申しわけございません。これはもっと元気のよさそうな写真を選んで、次にはお示

ししたいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 長谷川委員、お願いします。

長谷川委員 細かい字句の修正とかはたくさんあるんですけども、ちょっと幾つか申し上げておきたいのは、11ページなんですけれども、「魚離れ」のところで、安全な地場の魚を食べたいという消費者の根強い魚食志向が流通を変えつつあると。安全な地場の魚を食べたいという志向はあると思うんですけども、根強いとまで言っちゃっていいかなという気がするんです。アンケート調査をもとにそれを書き出されているので、傾向としてはそういうふうを読もうと思えば読めるんですけども、ちょっとそこに違和感があります。

それから、全体に魚食文化を広めようという気持ちはとてもよくわかるんですけども、ちょっと説教口調になっているかなという気がして、そのあたり後ほど細かいところで御提案も差し上げたいと思いますけれども、もう少し消費者の身になった書き方をしなければいけないかなという気がしました。

それから、皆さん御指摘されていまして先ほどの栄養塩の図があり、中身はともかくとして、14ページに図があり、17ページに「海のゆりかご」の減少という図があり、後ろの方にもまた環境の図がありなんですね。全体を通して読んでいて感じたのが、あちらこちらに同じようなお話が出てきて、かなり重複感があるなという気がしたんです。もう少しまとめて書き込まれていると、読みやすかったり、あるいはインパクトがあったりするのかなと思いました。それは多分全体の構成にかかわることなので、今ここで修正は難しいと思うんですけども、今後もう少しわかりやすい、読んだ人がインパクトがあって、響きやすいような書き方を工夫された方がいいのではないかと感じました。

例えばなんですけれども、今の栄養塩の話もそうですが、環境の話があちこちに出てきます。何か蒸し返すようで申しわけないんですが、今環境問題は非常に取り上げられていて、温暖化の話とか、それに対して海の温暖化への影響の深刻さとか、それから海がCO₂を30%吸収しているということが今改めてわかってきております。そうすると海をどうやって守っていくかというのは、環境省の話ではなくて水産庁の話でもあると思うので、もう少しその辺を結びつけてまとめて書いていくと、かなりインパクトが出てくるかなと思います。

私なんか環境の話で海のことを調べようと思ってインターネットを検索すると、自分の欲しい情報がなかなか引っかからないんです。それがあちらこちらに散見されているの

で、もう少し環境の検索に引かかるようにすると、それに伴って水産白書も読んでもらえるのかなという気がいたしました。

以上です。

石川企画課長 御指摘ありがとうございます。確かにまだ我々の工夫が足りなくて、消費者の方々に何か説明しようという気持ちが先に立ってしまって、まだ自然に読んでいただいて、食べようという気を起こさせるような文章になっていない部分があるかと思いません。またいろいろ御指摘いただきまして直していきたいと思っております。

「消費者の根強い魚食志向」という特集 - 11ページのところにつきましても、5ページのところで一応アンケート調査の結果なんかも御紹介しているものですから、一応同じ特集の中で書かせていただいたところではあるんですけども、余り無条件に使うのもどうだろうかという御指摘かと思しますので、ここはまた工夫を考えてみたいと思います。

それから、いろいろ図が多用されているということで、我々としてはできるだけ図を多用してわかりやすい資料にしたいと思っておりますが、余りごちゃごちゃになり過ぎるよりも、インパクトのある形で特に環境面からということで、検索にも引かかるようなという御指摘もあります。どこまでできるかわかりませんが、我々ももう少しわかりやすいものに表現も含めてしていきたいと思っております。ありがとうございます。

山内部会長 妻委員をお願いします。

妻特別委員 ちょっと細かい話になりますけれども、特集 - 12の方で、最後の行のところですが、「水産資源や食文化を守ることに繋がります。」という、消費することこういう書き方ですが、これはこれでよくわかりますし、そこまで書けば本当はいいんですけども、ただ、後の特集 - 13との兼ね合いで読みますと、余りここで「水産資源や食文化」というふうに言い切ると、ちょっと説明し切れないような気がして。ここは、漁業や食文化というふうに、「水産資源」ではなく「漁業」というふうにした方がはっきりするかなと。本当は水産資源まで書いてほしかったと思っておりますが、ただ、なかなかそこまで読めないなということです。ちょっと細かい話ですが。

あと感想なんですけど、特集 - 1の写真です。この海外の日本食レストランは、どこが海外なのかよくわからない。日本食レストランは大体そういう風景なので、なかなか海外の雰囲気を出すのは大変なんですけど、もうちょっといい写真があれば、それを使った方がいいんじゃないかと思っております。

それから、意見ではなくて感想なんですけど、私は去年の年末、ロシアに10日間ぐらい和

食レストランの調査、水産の消費調査に行ったんですけれども、日本にいと全く想像のつかないような和食消費のブームというものがある。それも全く想像がつかなくて、定着しているということなので、ここは魚食文化をこうやって特集されていますので、できるかどうかわかりませんが、本当はコラムか何かで、海外まで魚食文化が伝播して定着しているという情報を出せば非常にいいなという感じです。全体のスペースの問題もあるでしょうから、可能ならばということでございます。

あと細かい話は幾つかありますが、これは省略します。

山内部会長 お願いします。

石川企画課長 先ほど御指摘のありました特集 - 12ページの部分については、御指摘のとおり直させていただきたいと思っております。それから、特集の1ページのところで御指摘のありました写真については、確かにもうちょっと適当な写真があるんじゃないかと思っておりますので、探してみたいと思っております。海外の日本食レストランの状況については、農林水産省の方で調べた資料なんかも、最近は輸出促進の関係でありますので、どういうところを書き込めるか、どの程度書き込めるかわかりませんが、考えてみたいと思っております。ありがとうございます。

島貫特別委員 先ほどの長谷川委員の繰り返しになるかもしれませんが、特集 - 3、「進む「魚離れ」」ということから始まって、ずっと読んでいって、次ページ4の下段、「水産物は、カルシウムをはじめとする」というふうなことで、だんだんと魚の健康性というものを主張してきて、いよいよ盛り上がってきたかなと思ったら、次のページでは否定のことが今度は論じられている。やはりこの整理の仕方だと思っております。

先ほど濱田委員から、需要の開発、そうしたら魚に求めるものは何だろうかというものを、もっともっとアピールする部分があるんじゃないかなと思う。せっかくここで魚の健康さ、有利さというもの、医食同源、あるいは予防医学だよということ、もっともっと本当はあったはずなんです。ただ、科学的に証明されていないからなかなか表現も難しからうと思っておりますけれども、やはり魚に求めるものは、その健康さということであるならば、もう少しここでは盛り上げて、次のページがまた否定にならないような形の構成の仕方をお願いしていきたい。必ずしも否定ということではないんですけれども、今度は、魚が高いからと始まりますから。やはりこの流れが、先ほど長谷川先生が言ったように一貫していないように何か感じられる。思いはわかりますけれども、ストーリー性にちょっと欠けるのかなという思いがしています。

以上です。

石川企画課長 御指摘ありがとうございます。原案の段階よりは、御指摘、御意見を踏まえて、いろいろ栄養なり機能性なり書き込めるところは書き込んだつもりではございますけれども、それが皆さんにわかりやすく伝わるようにもう少し工夫が必要ではないかと受けとめております。

特集 - 5 ページのところも、否定とおっしゃいますが、そうじゃないんだらうという趣旨はわかっていただいたかと思うんですが、一応魚離れとか何とか言われる中で、先ほどの話ではありませんけれども、消費者の方々は魚食志向はまだ持っていらっしゃるんだということを言いたかったので、こういった資料を紹介させていただいておりますが、この説明の仕方についてももう少し全体的に流れがよくなるかということについて、もう少し我々も工夫させていただきたいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 石井委員、お願いします。

石井委員 海外における魚食文化の定着ということについては、私もカナダを最近取材しまして、同様に非常に定着している。学校給食におすしが出るような町があるということを知って非常に驚いたので、そのあたりは何らかの格好で書いていただけるとありがたいと思います。

それからもう1点ですが、特集 - 13で、これは前回もちょっと議論があったと思うんですが、クジラのコラムのところなんですが、何が言いたいかというのはよくわかったんですが、最後の2行が、言いたいこともわかるし、立場的にもわかるんですが、ちょっとコントラバーシャルな話で、鯨と人類は共存関係にあると考えていらっしゃる方も何人かいると理解しているわけです。どうしてもこの2行をここで入れなければいけないかということ、もう一度考えていただいて。この2行があるがためにちょっと、この議論は別でやってよ、みたいな感じがするわけですね。何か行きがけの駄賃みたいに書いてあるので。もし本当に言いたいことがこの上の十何行のところにあるなら、無理してここで書く話かなという気がします。もう一度考えていただけるとありがたいと思います。

石川企画課長 確かに御指摘のとおり、特集 - 13 ページのコラムにつきましては、ほかの先生からも御指摘があったとおり、趣旨がわかりにくいということ。タイトルの問題もあるかと思うんですけれども。捕鯨の議論をする際に、クジラが大量の魚を食べているということでよく言われているものですから、それと結びつけて考えられて、ちょっと誤解を受ける部分があるんじゃないかと思います。捕鯨は捕鯨で別途白書の中でも触れている

部分はございますので、先ほど来のほかの先生の御意見も含めて、ここのコラムの趣旨がもっとわかりやすくなるように工夫したいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 宮原委員、お願いします。

宮原委員 特集 - 15ページ以降のところ、第2節の「見つめ直そう、豊かな海」の(1)の「我が国の生産力が低下」、サブタイトルで「～日本の海が変わった～」というふうになっています。それから、特集 - 18ページを見ていただきますと、(2)で「輸入にばかりは頼れない ～世界の海も変わった～」、こういうふうになっているんですが、この「世界の海も変わった」中身を見てみますと、地球規模での環境変化と書いてありますが、これ中身は日本近海のことしか書いていないので、素直にここは括弧のタイトルは、地球温暖化が進むとか、そういう形にした方がよろしいのではないかと。せっきく2つの現象を並列的に書こうとされている気持ちはよくわかるんですが、かえって焦点がぼけるような気がしますので、そうされた方がいい。そうなりますと、特集 - 15の「～日本の海が変わった～」じゃなくて、「海が変わった」だけの方がいいんじゃないかと思います。

それから、「輸入にばかり頼れない」という特集 - 18ページのタイトルなんですが、これは非常に我々にとってはいい表現だと思います。もう少し表現はひと工夫あった方がいいかもわかりませんが、輸入に依存はできないということを書こうとする内容だと思いますが、ここは2つの要素があって、1つは海の資源の状況が変化していること、もう1つは世界的な魚食普及をここにもポイントとして挙げておいた方が。この2つの要素で、輸入に依存できないことが将来的には起こり得るということを書いた方が、もっとわかりやすいのではないかと思います。

石川企画課長 御指摘ありがとうございます。確かに海が変わったということ、それから世界の海も変わったというのではなくて、地球温暖化が進むということ。それから、輸入にばかり依存できなくなったということの関連で、世界的な魚食普及もあるんじゃないかということ。これは御指摘のとおりだと思いますので、ここの部分も表現の仕方を工夫していきたいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 そのほかいかがでしょうか。

それでは、特集についてはひとまずここまでにして次に入って、また全体的に御意見を求めますので、次は「平成18年度以降の我が国の水産の動向」、 章について何かお気づきの点がございましたらお願いしたいと思います。

井上委員、お願いします。

井上委員 私は時間の関係もあってこの第4節のところだけをちらちら見たんですけれども、例えば - 4 - 3です。後ろから3枚目です。上のところに、(2)として「地域資源を活かした漁村の活性化」とあるところですが、コラムのような形で「先進的事例」と書いてあります。ここには「大分県・熊野市」とありますが、大分県に熊野市というのはいないですね。本文を見ると「大分県佐伯市」と書いてあるので、恐らく佐伯市の間違いではないかと思えます。

次のページ、 - 4 - 5です。同じように先進的事例ですけども、これは地名が「島根県・鹿島町」とありますが、島根県に鹿島町という町はないです。島根は市町村合併が進んで、町は少ないですから。いずれにしても、行政区域としての町は島根にはないですから。

それから、この同じ四角の中の記述ですが、後ろから3行目、「新製品の開発の際に地元のおばあさんに昔の食べ方を聞いて参考にするなど」云々とありますが、これ、「おばあさん」という表現はいかがですか。

以上です。

石川企画課長 地名について間違いがございまして、まことに申しわけございません。大分県の多分これは佐伯市のことだと思いますので、ここは確認をして直させていただきます。

それから、島根県の鹿島町がないというのはおっしゃるとおりで、昔、鹿島町があったというのは私は覚えておりますが、広域合併で新しい市になっていると思いますので、そのところは見直しておきたいと思えます。

「おばあさん」という表現は、決して何か変なつもりといたしますか、親しみを込めた表現で書いたつもりではありますけれども、ここのところはもう少し、高齢者の方というような形で工夫します。ありがとうございます。

山内部会長 長谷川委員、お願いします。

長谷川委員 私も小さなことなんですけれども、 - 2 - 5で「中西部太平洋における」という項なんですけど、オブザーバー制度というのがあります。これは私知識がないものでわからなかったんですね。それで今回いろいろ脚注を読ませていただいてとても勉強になったんですけど、ぜひこれも脚注を入れてほしいなということです。

石川企画課長 監視取り締まり用のオブザーバーということで、脚注に入れさせていただきます。ありがとうございます。

山内部会長 そのほかいかがでしょうか。

井上委員。

井上委員 あとこれはどこということではなくて全体にかかわることなんですけれども、地名を書くときに、例えば「下関市」と書く場合に、これによると特集 - 11のところで唐戸の話が出てきますけれども、「山口県・下関市」と書いてあるんです。これは普通、地方自治体として山口県と下関市が何か共同の事業でもやっているならこういう表記でいいんですけども、内容的によく読むと、これは単に下関のことを言っているに過ぎないので、中ポツはつけなくて、「山口県下関市」と書くのが普通の表記なんですよね。そういう目でこれを見るとあちこちに同じような、統一されてそういうふうになっているんですが、ちょっと違和感を感じますね。

石川企画課長 確かに御指摘のとおり、県と市がそれぞれ別々に何か支援しているということではございませんので、このところは、その他のところの地名表記も含めて我々のところで整理させていただきます。ありがとうございます。

山内部会長 そのほかいかがでしょうか。

(2) 「平成20年度水産施策」(案)

山内部会長 それでは、続きまして、資料2の「平成20年度水産施策」(案)について御提案いただいて、また何かありましたら全体的に戻りたいと思いますので、資料2の「平成20年度水産施策」(案)について事務局から御提案いただきたいと思います。

石川企画課長 それでは、資料2の「平成20年度水産施策」(案)について御説明をさせていただきます。

資料は表紙をめくっていただきますと目次がございますが、全体の構成としましては8部構成になっております。コアになりますのは水産基本計画、昨年の3月に策定されました基本計画で、6つの柱がございます。「水産資源の回復・管理の推進」から始まりまして、 から始まる6つの部分が水産基本計画の構成に基づいた形でつくられている構成でございます。これに全体の概説と、それから最後の2つの項目、「その他重要施策」と、それから「総合的かつ計画的に推進するための取組」、こういったものを加えた形の構成になっております。

20年度の施策については、また別の紙に「予算の概算決定の概要」も配布させていただ

いておりますが、特に目新しい点をざっと御紹介させていただきますと、2ページの地球温暖化による沿岸漁場への影響の調査、資源管理の徹底の部分、6ページの大型クラゲ・トド対策、7ページのクロマグロ養殖、安定供給を図るための技術開発、こういったところが目新しい話として記載されているのではないかと思います。

それから、9ページの「国際競争力のある経営体の育成・確保と活力ある漁業就業構造の確立」の部分では、こちらに書いてございますように経営安定対策が20年度導入されるということ、それから下の方、次のページにわたって書いてございますが、燃油対策として価格高騰対策、省エネ漁業への転換の促進を図られるということを記載しております。

それから13ページでございますが、の「水産物の安定供給を図るための加工・流通・消費施策の展開」につきましては、例えば13ページの(1)の市場を核とした流通拠点の整備、こういったところについて若干書き込んでございます。

次に18ページのところでは、の「水産物の未来を切り拓く新技術の開発及び普及」ということで、2のバイオマス資源の利活用の促進の中で、海藻からバイオエタノールを生産するために必要な技術の開発等を実施する。こういったことを書き加えてございます。

以上、簡単でございますけれども、資料2の概要でございます。よろしく願いいたします。

山内部会長 ただいまの「水産施策」(案)の御説明につきまして、何かお気づきの点がございましたらよろしく願いします。

婁特別委員 済みません、資料2ではなくて資料1に戻っていいですか。

どこということではなくて、資料1全体を読ませていただきまして、わかりやすく、特に事例がたくさん出ていて、理解するのに非常にいいんですけども、ただ、先ほど地名のミス等もあったりするんですが、もう少し事例を出していただいて。私が見て、もっといい事例があるのかなというところもあったりするんです。だから、もう少し事例を出していただいて、これがいいというようなことをしていただくと非常にありがたいと思います。

それから、事例が出ているところと出ていないところもあったりするんですけども、極力事例はたくさん載せた方が。私も必ずこの白書は授業でテキストとして使っています。ずっと今まで使ってきているんですけども、その中で事例が出てくると、この事例をもう少し我々なりに取り上げて事例分析したりするというのがありますので、その意味

では白書で取り上げられた事例となると、産地にとっても地域にとっても名誉ですし、たくさん取り上げていただいた方がいいのかなということでございます。

石川企画課長 事例につきましては、先ほど来のほかの委員の先生方からの御指摘も踏まえて、もう少しいい事例がないかどうかもう一度探してみます。それから、できるだけ御紹介できるものはしていきたいと思っております。また、授業の中でお使いになるということで、もう少し掘り下げて調べたいときにどこを調べればいいのかということについても、できるだけ御紹介していけるような工夫をしてみたいと思っております。ありがとうございます。

山内部会長 資料1にも戻りましたので、全体的にもう一度見ていただいて、何かお気づきの点があればお願いします。

石井委員 全体ということで、施策の方では燃料油の高騰対策というところにつながると思います。こちらを書き換える必要はないと思うんですが、資料1のトピックスの8ページ目、燃油価格の高騰による影響というところですが、真ん中あたりに「漁獲物価格への転嫁も困難な状況」とあるだけなので、ここをもう少しきちり説明しないと、原料のコストが上がると、それをすぐ助けてあげる業界なのかというように誤解を招くおそれがあるので。また、ここで漁獲価格への転嫁が難しいということが、まさにこの後ろの特集なんかで書かれているように、需要開拓が必要であるとか、流通を見直す必要があるとか、あるいは輸入品との競争の話なんかへつながってくるわけなので、この燃料価格の高騰による影響というところで、この価格転嫁が難しいんだということをちょっと丁寧に書くと、施策の方でこの対策が必要だというのがわかりやすくなるのではないかと、そういう印象を持ちました。

山内部会長 事務局、お願いします。

石川企画課長 確かに御指摘のとおりでございますして、転嫁が困難という表現が、そのままとなかなか皆さん御理解していただきづらいところもあるかと思いますし、ほかのところとの記述の関係も含めて、このところはもう少し我々も工夫させていただきたいと思っております。ありがとうございます。

山内部会長 宮原委員、お願いします。

宮原委員 実はお隣の長谷川委員から御指摘をいただいたんですが、19年度の第1次案の方でございますけれども、 - 3 - 5 の漁業経営安定対策の話でございます。今長谷川委員から聞かれたのは、これはどういう事業ですかという中身もさることながら、農業と

比べてどうですかという質問も受けたわけですが、これは初めて漁業の世界に導入された画期的な制度でございますので、もう少しそういう位置づけを、画期的なものであるし、これを利用して漁業の経営を安定化させていくという前向きな記述をしていただきたいし、それからまたこれを拡充強化していくようなことまでつけ加えていただくと、なおさらありがたいと思います。

山内部会長 お願いします。

石川企画課長 ありがとうございます。確かに - 3 - 5 のところの漁業経営安定対策について、我々としても20年度の目玉になる事業でございますので、このところは単なる予算の説明ではなくて、この部分はもう少し政策的な意味での意義ということで、できるだけ前向きな部分が皆さんに伝わるような形で表現を工夫してみたいと思います。これは20年度新規でついたばかりの事業ですので、画期的だという部分も強調させていただいて、意義のところをよく触れさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

山内部会長 ほかによろしいでしょうか。

委員の先生方に本当に読み込んでいただいて、非常に貴重な意見をいただきましてありがとうございます。

それでは、大体主な意見も出たというふうに思いますので、本日の質疑・討議はこの辺で終わりたいと思います。本日出された意見は、事務局もお答えいたしましたように、十分これから検討していただきまして、諮問等の作成に生かしていただくようお願いしたいと思います。

そ の 他

山内部会長 それでは、事務局の方から何かございますか。

石川企画課長 本日はどうもありがとうございます。本日いただきました御指摘を踏まえまして、ただいま部会長からありましたように諮問案等これから作成したいと思っておりますので、またよろしく願いいたします。

それから、若干報告させていただきます。まず地球環境小委員会についてでございますけれども、昨年8月2日の本審議会、それから企画部会におきまして、地球環境問題への取り組みの強化ということで、水産政策審議会の企画部会の中に地球環境小委員会が設置されたところでございます。その際に、小委員会を開催したときに報告させていただく

ということになっておりましたので、昨年11月30日に食料・農業・農村、林及び水産の3審議会合同の第1回合同地球環境小委員会が開催されましたことを報告させていただきたいと思います。詳しい資料について農水省のホームページに掲載されているとおりでございます。また、議事録についてはまだ掲載されてございませんけれども、後日掲載する予定になっております。

最後に、今後の部会のスケジュールでございますが、本日いただきました御意見を踏まえまして、事務局で動向編の2次案と施策編の諮問案を作成いたしまして、次の部会で御審議をお願いしたいと思っております。

日程につきましては別途御連絡してございますけれども、皆様方の御都合を伺った上で、3月7日金曜日の午前10時から、ここと同じ水産庁中央会議室にて開催したいと思っておりますので、よろしくをお願いしたいと思います。正式な御案内はまた後日させていただきます。

以上でございます。

山内部会長 用意しました議題、報告は以上でございますが、何かございますか。

宮原委員、お願いします。

宮原委員 まずおわびを申し上げたいと思います。昨年の11月の本部会におきまして、委員の皆様方には大変御迷惑をおかけしたわけございまして、改めてここでおわびを申し上げる次第でございます。私の申し上げたいことはあるあったわけでございますが、これはもう皆様方の御決定に従うということでございまして、あえてここで申し上げることは差し控えさせていただきます。

ただ、議事録を読ましていただきまして、山内部会長さんがおまとめいただきましたように、今後、里海の問題については、当部会におきましてお取り上げをいただき、御検討していただく旨の御発言があったということでございまして、どうかこの企画部会におかれまして、里海につきまして御検討を賜ればありがたいとこのようにお願いを申し上げる次第でございます。大変申しわけなく思っている次第でございます。ありがとうございました。

山内部会長 今後ともよろしく願います。どういう形にするかちょっと考えておりませんが、何とか検討したいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

以上をもちまして本日の部会を終了させていただきたいと思っております。長時間本当にありがとうございました。

閉 会